



さいたま市立与野南小学校

【児童数】計375名

電話 831-0157



からかいやいじりといじめの境界線 ～気付くことから始まる予防～

校長 土屋 智樹

休み時間の様子をなんとなく眺めていると、子ども達は、友達と元気に外で遊んだり、楽しそうに会話をしたりしていて、どの子も仲良く過ごしているように思えます。しかし、よく見ると、独りでいる子もいます。大人が、そのような子を見かけたら、「友達がいないのかな」と心配に思うかもしれません。このように、注意深く観察すれば、まず独りでいる子の存在に目が行くものです。一方で、見ているだけでは気付きにくい問題もあります。それは、からかいやいじりの場面です。

からかう側もいじる側も、される側が嫌がるふりをせず、むしろ喜んでいるように見えることがあります。しかし、楽しそうに見えても、実はいじめだったというケースは少なくありません。皆様は、からかいやいじりといじめの違いを明確に説明できるでしょうか。簡単のようであり、実はとても難しい問いなのかもしれません。なぜなら、その境界線は曖昧で、行為をする側の意図と、受け取る側の感じ方に大きな違いがあるからです。

仮に、からかいやいじりをされる場面で、される側も同じようにはからかったりいじったりできる関係であれば、互いに冗談を言い合って楽しい時間を過ごしている、と言えるかもしれません。しかし、多くのケースでは、される側には同じようにはからかったりいじったりすることができない状況があると考えます。その場合、一方的にはからかわれたりいじられたりしているため、強いストレスを感じ、傷ついている可能性が高いのです。する側が「冗談だった」「場の雰囲気を和ませるつもりだった」と言っても、相手が楽しいと感じていなければ、それは決して冗談では済まされません。

この点から、私は「からかいやいじりといじめとの間に大きな違いはなく、本質的にはいじめと同じではないか」と考えます。皆様は、どのように考えますでしょうか。

さて、いじめかどうかの判断基準は、される側の感じ方にあると述べました。これは、本人自身が訴えないと気付かれにくく、周囲が判断するのは難しい問題です。だからこそ、まずは自分で声を上げることが大切です。子どもたちには、嫌なことをされたら自分から「嫌だ」とはっきりと言える人になってほしいと思います。

それでも、当事者同士の関係性によっては、自分から相手に「嫌だ」と言えないこともあるでしょう。また、周りから「大丈夫？」と声を掛けられても、本当の気持ちを言えずに「大丈夫」と答えてしまうこともあるかもしれません。そうした状況で、いじめを止めることができるのは、周囲の人々です。

5月28日のお話朝会では、子どもたちに「いじめを見たら、止めることのできる人になってほしい。そのためには、まず周囲がいじめに気付くことが重要だ。」と伝えました。そして、いじめに気付くための方法として、「相手の顔や様子をよく観察すること」が大切であることを紹介しました。

困った顔で下ばかり見ていたり、仲間に入れずにいつも寂しそうに一人でいたりする友達を見かけたら、どう行動するべきか。南っ子には、「どうしたの？」と声を掛けることができる人に、「いじめはよくない」と勇気をもって止めることができる人になってほしいと願っています。